

# 大宰帥大伴卿の贈答歌

吉 永 登

一

万葉集巻の五に漢文の書翰を含んだ大伴旅人と京人の間に交わした贈答の歌がある。その京人などについては何かと問題にすべき点があるので、ここではそれらの点について考えることにしたい。

まず初めに漢文の書翰と贈答の歌とを示すことにする。

a 伏して来書を辱うし、具さに芳旨を承りぬ。忽ちに漢を隔つるの恋を成し、復梁を抱くの意を傷ましむ。唯羨くは去留恙なく、遂に披雲を待たむのみ。(伏辱来書、具承芳旨、忽成隔漢之恋、復傷抱梁之意、唯羨去留無恙、遂待披雲耳)

歌詞兩首 大宰帥大伴卿(目次には「大宰帥大伴卿相聞歌二首」とある)

b 龍の馬も今も得てしか青丹よし奈良の都に行きて来むため

(巻五・八〇六)

うつつには逢ふよしもなしぬば玉の夜の夢にを継ぎて見えこそ(八〇七)

大宰帥大伴卿の贈答歌(吉水)

答歌二首(目次にも「答歌二首」とある)

c 龍の馬を我は求めむ青丹よし奈良の都に来む人のたに

(八〇八)

ただに逢はずあらくもおほく敷妙の枕去らずて夢にし見えむ

(八〇九)

右の a の記号をつけた手紙と b・c の記号をつけた贈答歌とは、全く関係のないものだということも考えられないではない。そうすれば次章以下で論じるような面倒な問題の起らないことも確かであろう。

しかし、万葉集は歌集である。例外的に一、二の散文を収めているばあいもあるが、独立もしない、その内容から見ても、明らかに返書と思われる漢文の書翰だけを何の詞書もつけずに収めるはずもないのである。それに目次が独立したものとして認めていないことも参考すべきではないだろうか。やはり一連のものとして扱っている通説に従うべきであろう。

一

a・b・c三つの中、bの作者が大伴旅人であることは、その注記に「大宰帥大伴卿」とあることよって明らかであろう。またcもその名は明らかでないが、歌の内容から見て京人であることは言うまでもない。残るaの漢文の書翰であるが、これがさきにも触れたように返書であることは、文中に「来書を忝うし」とあることで疑う余地がない。

ところで、aの返書の作者については在来二つの説があった。一つは旅人より京人宛の返書とする万葉集攷証や万葉集全釈の説で、別に理由は言っていないが、今日では通説になっている。他は京人より旅人への返書とする万葉代匠記や万葉集全註釈の説で、全註釈では次のように言っている。

……この書簡の文章は返書であるから、もし旅人の書とする時は、更にこの前に京人からの書があったはずであり、しかも歌によれば、また更にこの後にも京人からの書があったことになる。これは普通の交遊事情から見てもかなり特殊の場合である。然らば、どうしてこの文の次に旅人の歌二首が載っているかとならば、それは京人の書簡の余白に、旅人または大伴家側の人々が、旅人の歌を書き込んで置いたものと考えられる。

(同書五、四〇七ページ)

読んで見て明らかのように、何か歯切れの悪い言いまわしで説得

力に欠いている。それが今日通説となっていない理由であろうか。中には、日本古典文学大系本万葉集のように、「奈良人からの手紙に対する旅人の返書」と一応通説に従いながら、「去留無恙」に注して、「都を去った君も留っている私もともに無事で」と京人の返書であることを前提とした解釈を施しているものもある。しかしこの「去留無恙」の大系本の解釈は後に触れるように、わたしにとっては重大な意義を持つのである。

## 三

通説に従ってaの返書を旅人より京人へ送ったものとする、全体の構成は

(a) 京人 ↓ 旅人 書簡) 前引全註釈の指摘するように、aを旅人から京人に宛てた返書とすれば、当然京人から旅人宛の書簡があったことになる。)
   
a 旅人 ↓ 京人 返書)
   
b 旅人 ↓ 京人 贈歌)
   
c 京人 ↓ 旅人 返歌

となつて、他の事情を無視すれば、形の上だけでは一応ととのつていられるように思われる。これが通説となつているゆえんでもあろうか。

しかし、これではどうして「大宰帥大伴卿」という作者名がaの返書の前になくて、bの歌詞両首のところにあるかということの説明ができないのではないだろうか。また旅人の返書と、贈歌と、そ

れに対する返歌だけがあるということも自然でない。現に、aの書簡も書け、cの歌も作っている京人に、aの書簡に添えた歌のなかったことも不思議であれば、cの返歌に書簡の添えられていないことも不思議であろう。もともとあったのだが失われたのだとしてすませることは、あまりにも恣意に過ぎるように思われる。

それに何よりも通説の持つ弱味は返書の内容が都を離れている旅人のものらしくないということであろう。すなわちさきにも触れた「去留無恙」が日本古典文学大系本万葉集の言うように「都を去った君も留っている私も……」と解することもすなおに思えるからである。また「傷抱梁之意」にしてもそうであろう。尾生は約束した相手を橋下に待っていたが、待つ人は来らず、とうとう増水のために橋脚を抱いたまま溺れ死んだのであった。その尾生の故事を身につまされて悼しく思うのは、待つ側にあつて待たれる側にあるのではない。やはり待つ側に立つ京人の手になった返書というべきではないだろうか。

#### 四

土屋文明は一応通説に従つた上、aの返書に作者名のない理由について次のように言っている。

作者の名は前文の書牘の前に注するか、書牘歌詞をこめて後に注するかが当然であるべきに、何故に「歌詞両首」の下に注したか、之は推測するに書牘は憶良が旅人に代つて草案したもの

であり、憶良は其をば其の儘自分の記録中に控へ留めた。そこで附せられた歌詞をも序に手控したが、其は旅人の自ら製する所であるので、後日の為、他人の為にも、自己の為にも、紛れぬやうに特に「歌詞両首」の下に大宰帥大伴卿と注して置いたものと見える。此の辺については種々の説が立てられるのであるが、此の巻を憶良の手記と見て以上の如く説明するのが最も自然であろう。（万葉集私注第五卷、五二ページ）

たしかに一見識であることは否めない。しかし、巻五が憶良の手控であるということにも、なお慎重な考慮を要するものがあり、それに返書の内容から見て京人のものであるらしいことも前章すでに述べたところである。

また旅人には「報凶問歌」（巻五、七三九）に付せられた序や、藤原藤房に贈つた歌（八一〇）に付せられた書簡などの漢文がある。土屋文明はこれらをも憶良の代作と考えているようであるが、それは当時の事情をあまりにも無視したものでないだろうか。旅人の子供の大伴家持にも漢文の作のあつたことは万葉集によつて明らかで、当時の知識人にはこの程度の漢文を作ること大して苦痛でなかつたものと考ええる。

かりに一歩ゆずつて問題の無名の書簡等が旅人のために憶良が代作したものとするならば、同じ憶良の代作に、ある時は形式上の作者を明記し、ある時は明記しないという矛盾をどのように解釈したらいふであろうか。結局偶然という非論理的なもので処理するより

ほかはないのである。いずれの点からも土屋説には従えない。

また土屋文明は答歌の作者である京人についても、それが女性であり紀女王らしいことを指摘している。

さて奈良にあつて（aの）手紙の相手となつたのは何人か。記載がないから推測に止まるけれども、多分旅人と相愛関係にあつた人であろう。それ故に憶良も隔漢抱梁の（故）事を引いて文を草したに違いない。∴大宰府における大伴旅人に相聞の歌を贈つた者には、巻四に丹生女王（五五三、五五四）が見えるが、此の時の相手方が其の女王であつても無くても、詮議するに及ぶまい。（万葉集私注第五卷、五二ページ）∴「菟の馬をあれは求めむ」と相手の言葉についてすぐに素直に出て来るのは、やはり恋愛者の心持からであろうか。∴コムヒトのヒトの用法なども心をつけて見るべきである。つまり表むきは外々しいが実は親しみ尊んだ語である。丹生女王の作は「古の人」「人のかざしし」等のヒトが旅人に宛て用ゐられて居ると見られる。（同、五五ページ）

この私注の説は万葉集注釈が「出色の言だ」と感心しているところであるが、どうであろうか。丹生女王が旅人に贈つた歌というのは次の三首である。

丹生女王贈大宰帥大伴卿歌一首

天雲のそきへの極み遠けども心し行けば恋ふるものかも

（巻四、五五三）

古への人の食<sup>を</sup>させる吉備の酒病めばすべなし貫贖たばらむ

（五五四）

丹生女王贈大宰帥大伴卿歌一首

高円の 秋野の上の 撫子が花 うら若み 人のかざしし 撫

子の花（巻八、一六一〇）

私注の言うように三首中二首まで「人」ということばが用いられている。旅人に歌を贈つた京人も、その歌から見て女性のようであり、しかも「人」ということばを用いている。これが私注の京人に丹生女王らしさを認めたゆえんであろう。しかし、「人」ということばは万葉集中四〇二首の歌に用いられている。つまり一首に一度という頻度であるが、そうした高い頻度を持つ「人」であつてみれば、それを根拠にすることは危険というほかはない。それに京人はその歌から見ればあい、たしかに女性らしくはあるが、一面前章でも触れたように漢文で書かれた書簡の作者でもあるのである。漢文で書かれた書簡の作者である以上、これを女性とみることは難色があろう。

五

歌の女性らしさと同一人による漢文で書かれた書簡による男であることは、どのように調和させるべきであろうか。漢文で書かれた書簡はまず女性によって書かれることはないように思われるので、とりあえず女性らしい歌が男性によって作られるかどうかにつ

いて考えることにする。

万葉集の巻の十七に、病中の大伴家持を見舞った一族の池主の書簡と、これに対する家持の返書とが収められている。何れも歌もしくは詩を伴っていることは次のようである。

(池主の書簡と長歌とは略す)

1 山吹は日に日に咲きぬうるはしとあが思ふ君はしくしく思ほゆ (巻十七、三九七四)

2 わが背子に恋すべなかり葦垣のほかに嘆かふあれし悲しも

(三九七五) (天平十九年) 三月五日大伴宿禰池主

(家持の返書と七言詩とは略す)

3 咲けりとも知らずしもあらばもだもあらむこの山吹を見せつつもとな (三九七六)

4 葦垣のほかにも君がより立たし恋ひけれこそは夢に見えけれ (三九七七) 三月五日大伴宿禰家持臥病作之

右の贈答歌は一見して明らかかなように、まるで相愛の男女の歌である。2の離れていてあなたのことを嘆きつつけるわたしは悲しい、と歌いかけているのに対し、4の離れていてわたしのことを恋しく思ってくれたればこそ夢にあなたが見えたのだ、と応じるあたり、恋人間の応酬と言うべきであろう。またその鸚鵡返しの返歌のあり方は、旅人と京人とのそれと全く変りがない。しかし事実は大伴池主と家持との贈答になるものである。けっして男女間のそれでない。もし作者が不明であれば男女間の贈答歌としたであろう土

大幸帥大伴卿の贈答歌(吉永)

屋文明ではあるが、作者ははっきりと男性同士である以上、「これも挨拶に過ぎない」(万葉集私注第十七巻、一〇四ページ)と言わざるを得なかったのであった。

家持と池主との間に特殊な関係があったとすれば話は別であるが、まずそんな推測は当るまい。贈答歌でないが同じような例を今一つ挙げることにする。同じ大伴家持が正税帳使として上京の際、大目秦八千嶋の邸で送別の宴が張られた時、家持が主人の八千嶋に贈った二首の歌がある。その一首は

5 わが背子は玉にもがもな手に纏きて見つつ行かむをおきて行かば惜し (巻十七、三九九〇)

という歌である。家持が下僚の八千嶋に贈ったとの題詞がなかったら、まったくの相聞歌と見るべきであろう。振田向の相聞の歌に

6 我妹子はくしろにあらなむ左手の我がおくの手に纏きて往なましを (巻九、一七六六)

という歌がある。万葉集注釈が類歌として引用するところであるが、家持の歌との違いは初句だけだと言っても過言ではあるまい。これを家持と八千嶋との特殊な関係によると考えることは上長官が女性的な立場に立つことからあり得ないことであろう。

これらが万葉時代における男性同士の間でかわされた歌であり、また男性が男性に贈った歌なのである。こうした傾向、すなわち遊びをわたしは一種の文人趣味と解しているのであるが、それは大伴旅人のあたりから顕著になったものと考ええる。これは他の機会にも

触れたのであるが、万葉集には

7 奥山に住むとふ鹿の宵去らず妻問ふ萩の散らまく惜しも

(巻十、二〇九八)

のような、鹿が萩を妻問うなどという不合理な発想になる歌がある。もともと萩の花の咲く頃が鹿の発情期で、その頃男鹿が女鹿を求めて鳴く事象を

8 秋萩の散りのまがひに呼び立てて鳴くなる鹿の声のはるけさ

(巻八、一五五〇)

などと歌ったものである。そこから男鹿の鳴声が萩という妻を求めて鳴くのであると飛躍するためには、やはり今一つ橋渡しをするものが必要であった。それが旅人の次の歌である。

9 我が丘にさ男鹿来鳴く初秋の花妻問ひに来鳴くさ男鹿

(巻八、一五四一)

「花妻」とあるのは目には見ても手に取ることでできない妻、すなわち結婚の対象にならぬ女性だとせられている。鹿にとつて萩はまさしく「花妻」なのであろう。萩の咲く頃妻を求めて鳴くことが萩を求めて鳴くと表現せられ、それがやがて萩という花妻を求めて鳴くと歌われ、最後にはその「花妻」から花が脱して萩という妻を求めて鳴くと飛躍して行くのであるが、そうした不合理を認容するものがわたしのいう文人趣味である。

萩を鹿の妻と見立てる、そうした見方からすれば男性の一方が女性的な発想による歌を作ることはいえなかつたの

ではないだろうか。それが漢詩の影響によるものであるかどうかは、今のわたしにはわからない。そんなところに原因があるのではないかと思うばかりである。

本論に戻ることにする。旅人のばあいも、もちろん答歌の主、歌の内容から見て京人が女性であっていっこう差支えはないのであるが、前述するように逆に男性であったとしてもよいことになろう。京人が男女何れでもよいとすれば、aの手紙がこれも前述のように京人の手になるものと考えられる以上、当時の女性が漢文で手紙を書いたとは思われないので、やはり京人は男性と見るべきではないだろうか。

六

前述するところを纏めてみると

a 京人(男性)の手紙(漢文の手紙であるから男性である)

b 旅人の贈歌(「大宰帥大伴卿」とある)

c aに付せられた京人(男性)の返歌(女性の歌のようであるが、当時文人間にこうした歌が作られた)

となるのであるが、これではまだ解決しないものがある。それはaとcとがどうして分断せられていて、その中間に旅人の贈歌があるかということである。

たしかに正常とはいえないのであるが、次のように考えられないだろうか。すなわち、もともとaとcとが京人の返書と返歌として

纏まっていた。これを記録するに当って、旅人自身か家持であろうと思われるのであるが、不安を感じたに違いない。それは返歌は先人の言うように鸚鵡返しに作られている。したがって贈歌あつての返歌である。書簡はともかくとして、贈歌だけではどうしても記録しておきたかつたのではなからうか。場所もなるべく返歌に近くという意味でcの直前においたのであるが、混乱を避けるために「大宰帥大伴卿」と注記しておいた、それが今の形ではないかとわたしは思っている。そのために別の混乱を招いたことは、やむを得ないことであつたのではないだろうか。

## 七

このついでに、返歌cの第二首目の歌に見える詞句のよみ、もしくは意味に関し、わたしの意見を述べることにする。

第二句「あらくもおほく」について、本居宣長は「…おほ之」の誤りであるとし、万葉集略解がこれに同調している。いかにも「おほく」は抵抗を感じる訓で、「久」と「之」とが似ている点でも間違いやすいことも事実である。それにb cの贈答歌を通じて他の三首が何れも二句切れであることも「ただに逢はず あらくもおほし」とありたいところである。しかも「おほく」説を主張する通説にしても、「おほ之」とある古写本が一本もないということに支えられているだけで、文法的に納得のゆく説明をしているわけでない。中には「おほく」のまま切れろのだからという万葉集全釈の説も

あるが、なぜということには触れるところがない。

それでは「おほ之」がよいかというと、そうとばかりは言えないようである。「あらくもおほく」という言い方は珍らしいには違いないが、一つ二つ似たものがあつて、たとえば

10 見まくほり来しくも知久吉野川音のさやけさ見るにとも敷

(巻九、一七二四)

11 秋山の木の葉も未だもみたねば今日吹く風は霜も置応久

(巻十、二二三二)

などがある。もちろん、これらはよく見ると必ずしも同じとは言えないであろう。すなわち前者について言えば、問題の「あらくもおほく」は意味の上からは明らかに切れている。しかるに、10の来しくもしるく」のばあい切れていると見ること、また連用形と見て「しるくシテ」と下に続くことと見ることでもできるようである。しかし実を言うと「あらくもおほく」もわたしは「あらくもおほくシテ」と解してもよいと考えている。その点「来しくもしるく」のばあいと変らない。

後者11の「霜も置きぬべく」のばあいも一見違いがあるようであるが、やはり同じではないだろうか。二句にあるか五句にあるかの違いで、「おきぬべし」と平明に言い切ることも可能なら、「おきぬべくシテ」と余韻を持たせることも可能であろう。

何れにしても今日から見れば多少抵抗を覚える表現だと言えるが、そのゆえに用例のあるものを抹殺してかかることは危険であ

る。

## 八

同じ歌の末句「夢にし見えむ」は、「夢で逢ひませう」と解する万葉集注釈はもとより、「夢に見えるやうにいたしませう」と解する万葉集全釈・日本古典文学大系本、「夢に見えませう」と解する万葉集私注などを通じて、必ずしもわからせる努力が払われているとは言い切れない。

当時、夢に関してはすでに先人の指摘するように二つの考えがあった。ここで必要なのは

12 夜昼といふ別き知らずあが恋ふる心はけだし夢に見えきや

(巻四、七一六)

という歌に見えるものである。すなわち或人が誰かの夢を見ることが、その誰かが或人を思っているからだという考えである。したがって問題の「夢にし見えむ」は「む」が意志をあらわす以上、あなたのことを思いつづけて、あなたの夢に見られましようと思すべきことになる。もちろん訳文としてここまで言った方がよいかどうかは別であるが、真意はこうだというまでである。

「夢に見えこそ」すなわちわたしの夢に見えてくれ(わたしのことを思ってくれ)に対する「夢にし見えむ」すなわち御注通りあなたの夢に見られましよう(あなたのことを思いましよう)なのである。もともと自動詞に意志の助動詞などつかないのではなからうか。